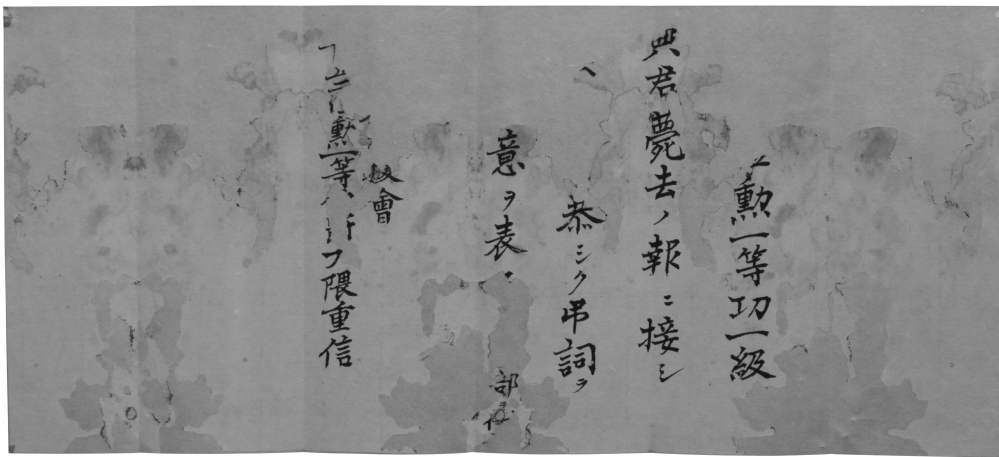


資料館だより

第 76 号
2015.9.30

コーナー展予告

乃木家葬儀関係文書
～館蔵資料より～

追悼文（大隈重信）

『乃木家葬儀関係文書』は、陸軍大将・乃木希典の邸宅であった「旧乃木邸」より昭和62年（1987）に当館へ移管された総数532点の文書群です。同じく旧乃木邸から移管され、平成22年度に修理が完了した『乃木文庫』と同様、虫損や腐食の進んだ資料が多く、平成23年度から修理事業を開始し、平成25年度に完了しました。

大正元年（1912）9月13日、乃木希典は夫人・静子とともに自邸（旧乃木邸）において、明治天皇に殉じ自刃します。その死は日本国内のみならず海外でも大きく報じられ、多くの人々に衝撃を与えました。9月18日、青山葬儀所で行われた乃木夫妻の葬儀には、10万人以上の参列者が集まり、最期の別れを告げたそうです。

本文書群には、乃木夫妻の葬儀に際し、軍人や乃木が院長を勤めていた学習院の教職員・学

生、大隈重信ら政界関係者のほか、全国各地の市井の人々から寄せられた弔辞・追悼文が数多く見られます。また、数は少ないですが、台湾総督として赴任した乃木に従い彼の地で亡くなった母・寿子や日露戦争に出征し、戦死した二子・勝典、保典への追悼文も含まれています。

今回のコーナー展で紹介する『乃木家葬儀関係文書』は、乃木家という一家族の葬儀に関わる資料ですが、全国から多数寄せられた弔辞・追悼文は、明治に殉じた乃木夫妻の死が世間に与えた影響の大きさを物語っています。

会 期：平成27年10月28日（水）

～12月16日（水）

会 場：港区立港郷土資料館

はりまあこうはんもりけやしきあとかそういせき 播磨赤穂藩森家屋敷跡下層遺跡の調査

高山 優 ・ 駒形あゆみ
(学芸員) (同)

平成27年(2015)年5月、浜松町一丁目で人骨が発見されました。

発見時、この地が江戸時代に大名屋敷であったことから、人骨は屋敷内に造られた墓地に葬られたものと推測しました。しかし、調査の結果、人骨は屋敷造成層より下の層に埋められていたことが確認され、人骨出土地が大名屋敷となる前、墓地であったことが明らかとなりました。

江戸幕府が開かれる前、遺跡周辺は、^{あし}蘆や^{よし}葦が生い茂る海を臨む低地でした。その様子は寛永9年(1632)頃の製作とされる『武州豊嶋郡江戸庄図』から推測することができます。森家は、その約20年後の承応2年(1653)までにはこの地を拝領し屋敷としていたことが明らかとなっています。今回発見された墓地は、森家が屋敷地を整備した造成層の下で発見されたのです。

調査で検出された遺構は、円形木棺、方形木棺などに遺体を納めた埋葬施設の他、排水溝、上水木樋などです。埋葬施設の数については調査中ですが、新旧が重なるように、集中して埋められていた箇所もあります。排水溝は、板材と再利用した屋根瓦を用いて造られたとみられます。東西方向に敷設されていました。上水木樋は3条検出されています。これらは埋葬施設よりも新しい時期に設置された、大名屋敷に伴う施設と考えられます。

出土遺物は、人骨や木棺材、木樋を除くと平箱で5箱ほどになります。銭貨、漆器碗、陶器の碗や皿、数珠玉などが出土しました。詳細については調査中ですが、埋葬施設から出土した銭貨には、寛永通宝が含まれず、寛永通宝鑄造(寛永13年〈1636〉から)前に多用された渡来銭を主体とします。また、埋葬施設の内部や同

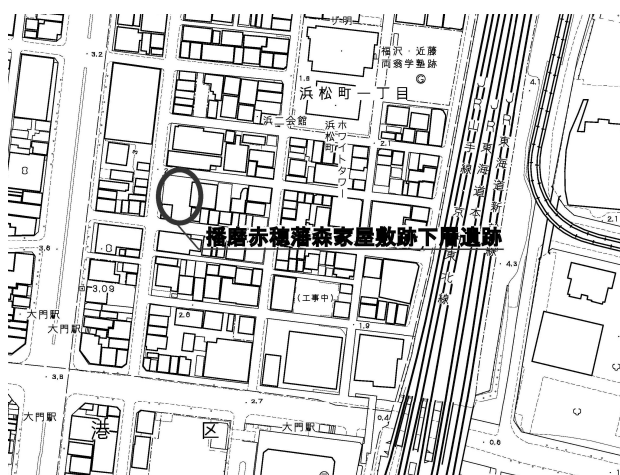
時期の層から出土した陶器に、天目碗や志野皿が多くみられるなど、墓地が中世末から近世初期に営まれていた可能性を示しています。

徳川家康入府前、現在の浜松町駅の北方から東京駅付近まで、日比谷入江と呼ばれる入江が入り込んでいました。この入江の岸部に、中世から近世初期にかけて、多くの墓地が造られていたことが、遺跡発掘調査の進展により明らかにされています。これらの墓地遺跡はいずれも、日比谷入江の奥まった辺りに位置しています。これに対し今回発見された遺跡は、入江の開口部に立地しています。本遺跡の発見により、中世から近世初頭にかけて、日比谷入江の奥まった区域に留まらず、当時の海浜部に広く墓地がつくられていた可能性が示されました。調査はまだ途上です。より詳細な調査結果については、今後の刊行物等を通じて発表します。

〈謝辞〉

調査ならびに速報展示、本誌での紹介を行うに当たり、次の方々・諸機関からご助力をいただきました。記して謝意を表します。(五十音順・敬称略)

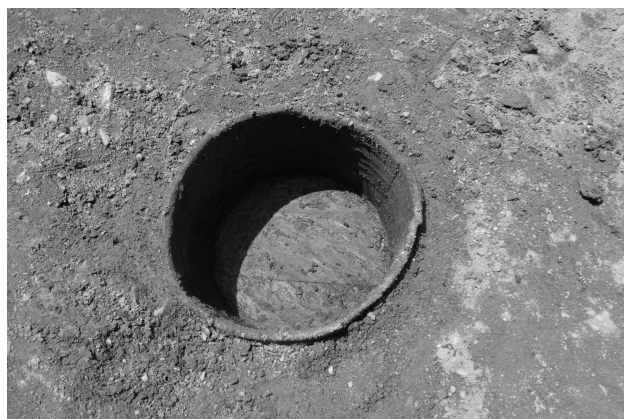
追川 吉生、小川 慶一郎、鯉渕 凌子
小杉 由紀子、後藤 宏樹、斎藤 進
嶋瀬 拓、高山 結美、中野 光将
株式会社千代田組、共和開発株式会社



遺跡位置図



遺跡全景写真



円形木棺出土状況写真



方形木棺出土状況写真

中世から近世初頭の墓地 遺跡

播磨赤穂藩森家屋敷跡下
層遺跡は、日比谷入江の
開口部に位置しています。



菩提寺増上寺への道程

— 徳川将軍の葬送ルート —

竹村 到

(文化財保護調査員)

天正18年(1590)、江戸に入府した徳川家康は、増上寺の住職源誓と師檀関係を結んだといわれています。徳川家の菩提寺となった増上寺は、慶長3年(1598)に現在地(芝公園周辺)に移転し、都市江戸を代表する大寺院となります。

徳川将軍15人のうち、二代秀忠(寛永9年死去)、六代家宣(正徳2年死去)、七代家継(正徳6年死去)、九代家重(宝暦11年死去)、十二代家慶(嘉永6年死去)、十四代家茂(慶応2年死去)の計6人が増上寺に葬られています。

増上寺は菩提寺でありながら、秀忠の後は三代続けて寛永寺に葬られたため、その不満を「強訴」したと伝えられています。そのためか、家宣は「近代の祖各上野に葬し、増上寺へ詣る人も多からず」と述べ、自身については「世をさらは増上寺に葬すへし」と遺言しています。

ところで、将軍が増上寺に葬送される際、どのようなルートを辿ったのでしょうか？ 残された史料からは、秀忠を除く5人の将軍の葬送

ルートがわかります(左下図参照)。以下、港区域における葬送ルートを見ていきましょう。

家宣の時は、江戸城外堀を渡る際に虎御門でなく新し橋となりますが、将軍の増上寺参詣ルートとほぼ同じです。愛宕下通りを抜け、真福寺薬師堂前を左折し、薬師小路の途中から御成門方面に進みます。ただし、御成門は通らず、東海道方面に左折し、表門に向かっています。

家継の時は、幸橋御門を通過し、そのまま愛宕下大名小路を直進して、突き当たりを左折して東海道に出ています。

家重と家慶は同じルートです。はじめは家宣と同じルートですが、薬師小路を途中で曲がらず、直進しています。愛宕下大名小路に出て、すぐ次の角を左折して東海道に出ています。

家茂は、上洛中に大坂で亡くなりましたが、遺骸は船で江戸に運ばれ、江戸城に安置されたのち、増上寺に葬られました。この時は、芝口橋を通過し、東海道をそのまま直進しています。

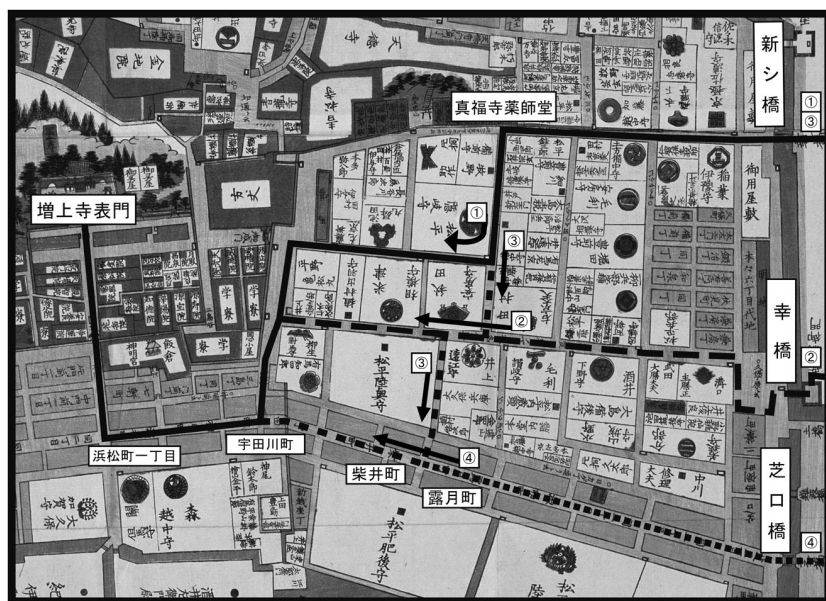
各ルートの設定経緯は不明です。橋や道路の

工事など物理的な要因も考慮されたと思われます。ただ、これまで見てきたように、時代が下るにつれて武家地を通る距離が短くなり、町屋を通る距離が長くなっていることがわかります。

将軍の葬送は、將軍家や幕府の權威を示す側面もありましたから、葬送ルート設定の背景には、權威の高下を示す指標が隠されているのかもしれません。

【参考文献】「徳川家宣遺戒写」(『増上寺史料集』第1巻、1983年)、佐藤麻里「徳川将軍の葬儀・法要と増上寺」(平成21年度資料館講座「増上寺徳川家霊廟の世界」 第二回レジュメ)

【港区域における将軍の葬送ルート】



①正徳2年(1712) 家宣〔秀忠以来80年振り〕 ②正徳6年(1716) 家継
③宝暦11年(1761) 家重・嘉永6年(1853) 家慶 ④慶応2年(1866) 家茂

終戦70年 — 港区の戦中・戦後 —

小緑 一平

(文化財保護調査員)

太平洋戦争終戦から70年の節目を迎える本年、戦争の悲惨さを体感し、また戦後に平和の尊さを伝え続けながら復興に奔走した人々の思いを垣間見ることで、戦争や平和について改めて考えていただくため、平成27年7月17日から9月16日まで、「コーナー展 港区平和都市宣言30周年 終戦70年 — 港区の戦中・戦後 —」を開催しました。

日中戦争を皮切りに始まった戦争は、昭和16年(1941)12月8日の真珠湾攻撃を契機に本格化します。昭和20年(1945)8月15日に終戦を迎えるまでに、東京を含めた日本の都市は空襲による無差別爆撃の対象とされ、一般市民にも数多くの犠牲者が出たほか、人々は物資や住宅不足により過酷な生活が強いられました。

このコーナー展では、「戦時下の暮らし」・「戦地へ」・「空襲」・「終戦から復興へ」という4つのテーマを設定し、展示を行いました。

この中で、戦時下の人々の暮らしに関わる資料をいくつか紹介しましょう。「浜三町会々則」と「芝区浜松町三丁目町会隣組団略図及役員名簿」は、戦時中の浜松町三丁目町会に関する資料です。町内会(町会は町内会の呼称の一つ)は日中戦争の頃に地方行政の末端機構として漸次組織化され、戦時行政事務の遂行に大きな役割を果たしました。町内会は昭和22年(1947)に法制上は廃止され、かつ結成が禁止されましたが、昭和27年(1952)に禁止が解かれると地域自治の任意団体として多くの町内会が再組織化され、現在に至っています。

また、「東京市隣組回報」は当時東京市内の隣組の回覧板で閲覧されたものです。回覧板は、戦時中に隣組や町内会の連絡手段として広く普及したもので、地方を中心に現在でも利用されています。

政府はこのような戦時体制づくりを行う一方で、軍事支出の増大に伴う大量の公債消化に対応するため、「国民貯蓄奨励運動」を推進していました。郵便貯金も「貯蓄報国」のスローガンの下、昭和10～20年(1935～45)の10年間で現在高金額約14.6倍という未曾有の急拡大を実現しました。この時期の政府による強力な貯蓄の奨励が、日本人の「貯蓄は美德」とする意識の形成に影響を与えたともいわれています。展示した「郵便貯金通帳」は、昭和16～18年(1941～43)に使用されたものです。

同様の理由で、簡易生命保険(簡保)への加入も奨励されました。簡保は大正5年(1916)に当時の通信省が始めた生命保険で、戦時中「保険年金報国運動」・「一戸一口増加全県運動」・「一億新加入運動」が次々と実施され、やはり昭和10～20年(1935～45)の10年間で保有契約保険金高約7.6倍の急成長を遂げました。展示した「簡易生命保険奨励感謝状」は、「一億新加入運動」実施中の簡保の普及・奨励に対する感謝状です。

また、「割増金付戦時貯蓄債券」は戦費調達のために募集された戦時公債の一つで、日本勧業銀行が実施する抽選に当選した債券は割増金付で償還されることになっていました。終戦直前にこの割増金の抽選部分が独立した「勝札」が発売され、戦後の宝くじへと発展しました。

こうしてみると、いくつかの身近なものや制度の起源、発展期が、戦時期にあることに気づかれます。みなさんもこの機会に、戦争や平和について考えるとともに、改めて身近なものや制度の戦中・戦後の歩みについて思いを巡らせてみてはいかがでしょうか。

【参考文献】郵政省編『郵政百年史』(1971年 財団法人 郵政省編、大山真人『宝くじ戦争』(2005年 洋泉社)

都営高輪アパート

戦後初の鉄筋コンクリート造 集合住宅

川上 悠介
(学芸員)

港区は、昭和20年（1945）の空襲によって甚大な被害を被りました。多くが焼夷弾による空襲で、区内大半を占めていた一般市民の木造住宅が焼失し、焼け野原となりました。

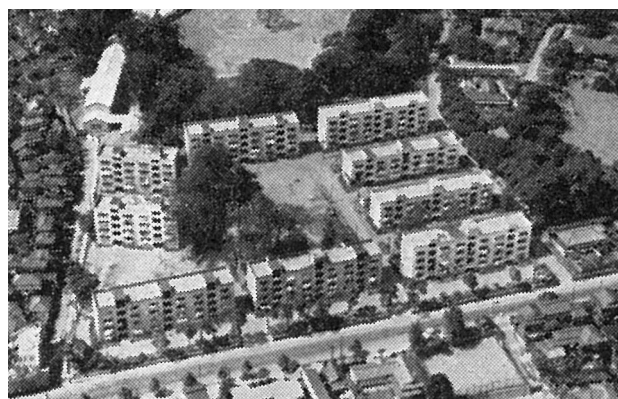
そのため、戦後の住宅不足は深刻な問題の一つとなります。空襲で家を失った人々だけでなく、戦中に実施された強制疎開（建物疎開）によって建物を解体された人々、さらに戦争へ出兵していた人々や、中国等から引き揚げてくる人々の住宅も必要となり、「住宅よこせ運動」などが起こったといえます。

港区内で戦後一番早くに供給された公営住宅は、昭和21年5月の都営住宅で、麻布区東町（現・港区南麻布一丁目）に木造平屋建て応急簡易住宅29戸が竣工します。これを皮切りに同年末までに区内8か所約300戸が完成しました。

一方、昭和20年11月5日、後に建設省（現・国土交通省）となる戦災復興院が、主に空襲を受けた都市の復興を目的に設置され、芝区立韮絵国民学校（港区虎ノ門3-6、現・御成門小学校に統廃合）の一部を事務所として間借りし復興計画を進めました。昭和21年3月には、建築技術者で鉄筋コンクリート構造の第一人者でもあった阿部美樹志が戦災復興院の総裁に着任します。ここで阿部は、鉄筋コンクリート（以下RC）による恒久的な住宅供給こそが本来の復興であるとの考えを示します。この見解に対し院内では、木造の数倍のコストがかかるRC造ではなく、木造を多数供給すべきであるという反対論が大半を占めましたが、阿部は信念を貫き、材料の調達や建築許可を受けるため、GHQに英語で直談判し、昭和22年に建築許可を受けると共に、鉄とセメントの特別配給にまでこぎつけました。

この結果、昭和23年5月という戦後間もない時期であるにも関わらず、RC造4階建て2棟48戸が

都営高輪アパートとして竣工しました。場所は、東京都へ払下げられた高輪一丁目の高松宮邸敷地の一部があてられました。事業主体は東京都でしたが、国の戦災復興院が計画主導し、戦災復興院住宅局によって設計も行われました。また、復興院総裁阿部自らの発案で、壁構造という前例のない工法が採用されます。これは、セメントの節約、施工の簡素化につながるだけでなく、柱の無い間取りを可能としました。さらに、高輪アパートには、特別に構造、材料、設備、衛生、保健、住まい方、防災、管理、その他（思想、世論）などを専門とする研究者11名が実験的に入居し、調査や研究会を実施しました。この調査結果は東京都へ報告され、翌年同所に竣工する第二期7棟140戸の設計に反映されただけでなく、その後建設される都営の集合住宅の設計に活かされることになります。



昭和34年頃の高輪アパート9棟『港区史』より

戦後初のRC造集合住宅、都営高輪アパートは、平成2年（1990）にその役目を終え建替えられましたが、日本の集合住宅黎明期の代表作であるこのアパートは、前向きに戦後復興への道のりを歩んできた人々の証であり、希望あふれる平和な生活への象徴であったといえるでしょう。参考：住宅総合研究財団研究年報No. 27「住居衛生研究の女性パイオニア、駒田栄に関する研究」他

夏休み学習会 ～東京湾 自然と人～

「クジラの秘密を探ろう！」開催

山根 洋子

(文化財保護調査員)

平成 17 年度より港郷土資料館と東京海洋大学海洋科学部附属水産資料館の連携事業として開催している夏休み学習会は、今年で 11 回目を迎えました。港区在住・在学の小学 4～6 年生、中学 1 年生が対象です。これまで、東京湾の動物や植物、海苔作りの歴史、伝統漁業、埋め立てや沿岸地域の開発など、東京湾にまつわる様々なテーマに沿った学習会を行い、多くの小学生や中学生が参加しています。

今回の学習会のテーマは、昨年に引き続き「クジラ」で、8 月 18 日と 19 日の 2 日間に渡り行われました。

皆さんは東京湾にクジラが生息していることをご存知でしょうか？「スナメリ」という体長 2 メートルにも満たない小さなクジラです。学習会初日の 18 日、港郷土資料館ではこのスナメリについて、国立研究開発法人 水産総合研究センター 国際水産資源研究所の吉田英可先生をお招きし、お話ししていただきました。

クジラの仲間は体長 4m 程度を目安に、それよりも大きなものがクジラ、小さなものがイルカと呼ばれており、最大でも体長 2m 程にしかならないスナメリはイルカの部類に入ります。吉田先生からは、スナメリは水族館でよく見るハンドウイルカなどのような背びれはなく、頭も丸い形をしていること、沿岸に生息するため昔から人々に目撃されることが多く、人間の影響を受けやすいこと、1 種と考えられていたスナメリが、2 種に分かれるという説が認められつつあることなどを教えていただきました。また、日本におけるスナメリの分布、呼び名、生息数、餌、成長など、スナメリのあらゆることについて学ぶことができました。

さらに、子どもたちは吉田先生から提供していただいたミンククジラのひげ板とゴンドウク

ジラの歯を実際に手に取って観察した後、それぞれに紐を付けてクジラひげのストラップと歯のペンダントを作成し、記念に持ち帰りました。

翌 19 日は、東京海洋大学海洋科学部附属水産資料館主催で、同大学大学院の教授であり水産資料館館長でもある加藤秀弘先生によるクジラに関するお話をお聞きしました。

加藤先生の講義では、最近までメソニクスと言われていたクジラの祖先が、実はカバの祖先と同じであったことや、現在のクジラに見られる骨盤のなごり、鼻の位置などを画像で確認しながら、クジラの進化の過程などについて学びました。加藤先生は子どもたちへ問いかけながらお話を進め、反対に子どもたちも積極的に先生へ疑問をぶつけるなど、楽しく活発な講義となりました。

また、ひげクジラと歯クジラの餌の食べ方について、大学院生による模型を使った解説もあり、理解をより深めることができました。その後、鯨ギャラリーへ移動し、セミクジラやコククジラの全身骨格標本を観察して、骨格から想像されるクジラの姿を描きました。皆、クジラの大さや特徴をよくとらえており、学習会の最後には子どもたち各自が、どのようところにポイントを置いて絵を描いたかを説明し、先生等による講評も行われました。

子どもたちは、この 2 日間でクジラについて、とても詳しくなったと思いますが、今後、身近にある東京湾や他の海の生物についても、さらに関心を持ってくれることを期待しています。

吉田先生のお話では、羽田空港に着陸する飛行機からスナメリが見えることがあるそうです。機会がありましたら皆さんも、丸い頭をしたスナメリを機内から目を凝らして探してみたいかがでしょうか？

事業予定 (平成27年10月～)

コーナー展

・「乃木家葬儀関係文書～館蔵資料より～」(表紙参照)

10月28日(水)～12月16日(水)

・「平成27年度指定文化財展」

12月18日(金)～平成28年1月20日(水)

・「港区遺跡展—最近の発掘調査から—」

平成28年1月22日(金)～5月18日(水)

講座など

・土曜体験教室「管玉作り」・「勾玉作り」・「縄文耳飾り作り」

10月31日(土)・12月19日(土)・平成28年2月13日(土)

・第一回資料館講座「江戸時代のお金を考える」

11月6日(金)・13日(金)・20日(金)

・第二回資料館講座(全3回、曜日未定)

平成27年度内

・親子学習会(全2回、土曜日)

平成28年3月(予定)

・各事業の詳細は、『広報みなと』や郷土資料館ホームページをご覧ください。

・当館の刊行物の一覧は、ホームページに掲載されています。販売は、展示室横の事務室でおこなっています。

事業報告 (平成27年3月～平成27年9月)

①コーナー展「平成26年度指定文化財展」

2月20日～3月18日

②資料館講座「縄文時代の森林資源利用」(全3回)

3月6日・13日・20日

③親子学習会「日本庭園にふれてミニミニ石庭

(枯山水)を作ってみよう！」(全2回)

3月14日・28日

④コーナー展「日本の開国とその影響」

3月20日～5月20日

⑤土曜体験教室「勾玉作り」・「縄文耳飾り作り」

5月9日・8月8日

⑥コーナー展「新収蔵資料展」

5月22日～7月15日

⑦古文書講座(全5回)

7月3日・10日・17日・24日・31日

⑧コーナー展「港区平和都市宣言30周年

終戦70年 — 港区の戦中・戦後 — 」

7月17日～9月16日

⑨夏休み体験ミュージアム「チャレンジ！縄文土器を作ろう」(全2回)

7月28日・8月24日

⑩港郷土資料館・東京海洋大学海洋科学部附属水産資料館連携事業 夏休み学習会

～東京湾 自然と人～ 「クジラの秘密を探ろう！」(全2回)

8月18日・19日

港区立港郷土資料館の利用案内

交通

JR「田町」駅下車徒歩5分、都営地下鉄「三田」駅下車(A3出口)徒歩2分
都営バス「田町駅前」停留所下車徒歩2分、港区コミュニティバス(ちいばす)
「田町駅前」停留所下車徒歩2分、「田町駅西口」停留所下車徒歩3分

開館時間

9:00～17:00

(さわれる展示室の開室日時は、
火・金・土の12:30～16:30)

休館日

日曜日・祝日・第3木曜日・年末年始
特別整理期間(平成27年度は10月13日
(火)から27日(火)まで)
(臨時休館などはHP等で随時お知らせします)

入館料 無料



『資料館だより』第76号

平成27年(2015)9月30日発行
編集・発行 港区立港郷土資料館
〒108-0014

東京都港区芝5-28-4

Tel. 03-3452-4966

Fax. 03-5476-6369

<http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/muse/>

tokyo.jp/muse/

刊行物発行番号 27108-7541